

1 外国語活動・英語科における「問いをもち、主体的に追求する姿」

本学校園外国語活動・英語科では、「問い」を、児童・生徒が目指す姿を思い描き、そこに向かっていこうとする際に芽生える願いや疑問であるにとらえている。他者のことを知りたい、自分のことを伝えたいという願いをもちながら、そのためにはどのようなことを学ばよいか、学んだことをどのように活用して伝えたらよいかという疑問を解決する経験を積んでいくことが、主体的に英語を学び続ける原動力になると考えている。そこで外国語活動・英語科では「問いをもち、主体的に追求する姿」を次のように定義した。

- 様々なことがらに関心をもち、積極的に他者のことを知ったり自分のことを伝えたりしようとする姿
- 課題意識や目的意識をもち、試行錯誤しながらよりよいコミュニケーションを目指す姿
- 学んだことをその後の学習や生活にいかし、自分の思いを広げたり深めたりする姿

2 「問いをもち、主体的に追求する姿」を求めて

問いをもち、主体的に追求する姿を求めて、外国語活動・英語科では以下の手立てを考える。

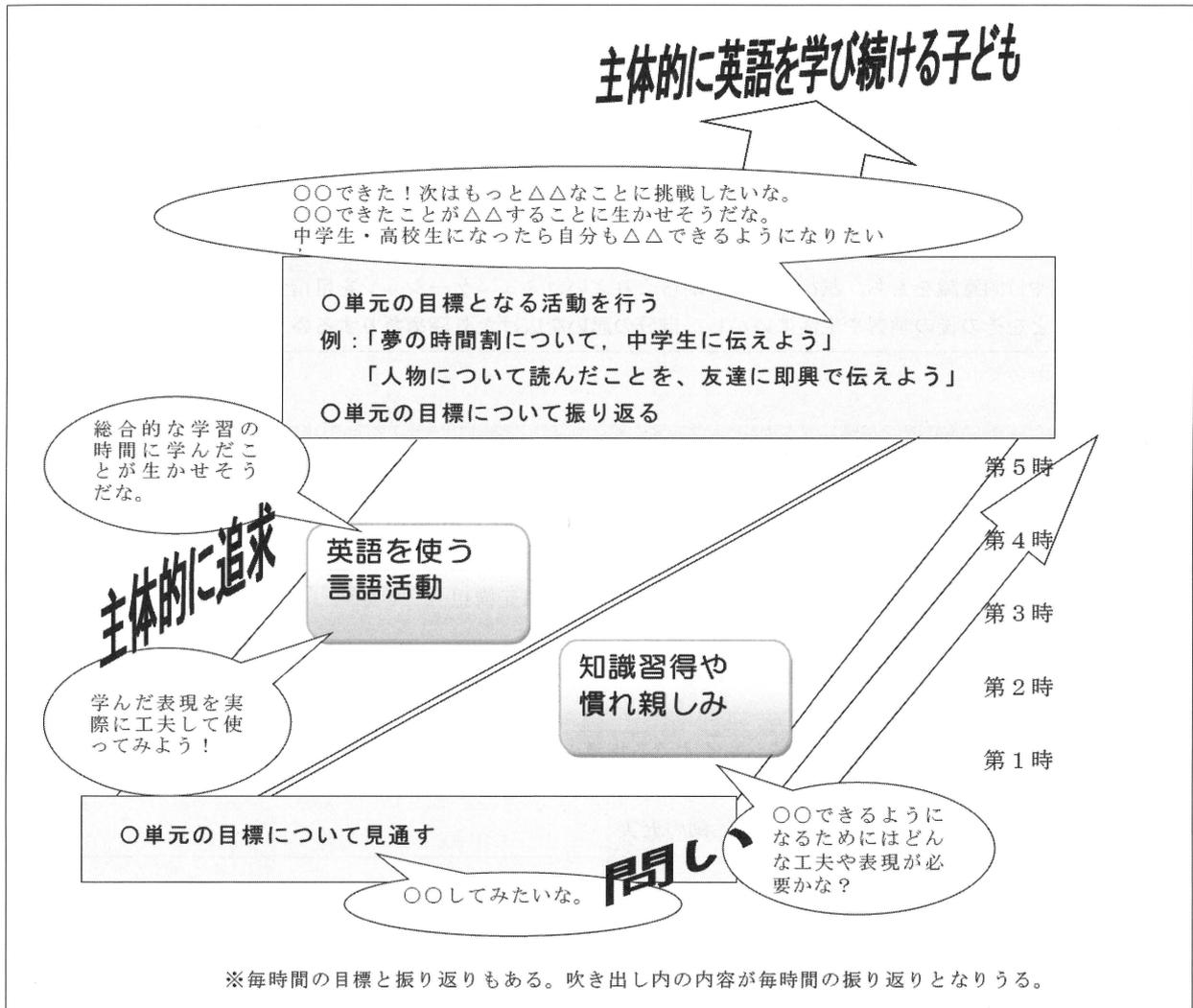
- 子どもが願いや疑問を抱くことのできる単元目標の設定と単元構想
 - ・ 多様な考えを引き出すことができる課題の設定
 - ・ 目標について見通す・振り返る活動の工夫
 - ・ 小中で一貫性のある目標の設定
- 「知りたい」「伝えたい」という気持ちをくすぐる指導の工夫
 - ・ 相手意識をもてる言語活動の充実
 - ・ インタラクティブ（双方向的）な言語活動の充実

子どもが主体的に英語を学ぶためには、願いや疑問を抱くことのできるような課題や教材との出会いが必要である。そのために、他教科等で学んだことや自分の生活と結び付けるなどして、多様な考えが生まれるような言語活動を単元の目標として設定し、そのゴールに向かって学習を進めていく。また、小学校における外国語活動の教科化を見据え、外国語活動での学習が、中学校にどうつながるか小中で一貫性のある目標を設定することも大切である。例えば、外国語活動で、子どもたちが自分の行きたい国のことを交流し合った後、中学生が同じテーマで話す様子を見ることができれば、「自分も中学生みたいに英語を話してみたい」という願いを抱くであろう。また、「今は言いたいことを十分には言えないけれど、中学校で本格的に英語を学習して、言いたいことを言えるようになる」と、より主体的に学習する気持ちになるであろう。

さらに、単元目標に向かって学習を進める際には、「知りたい」「伝えたい」という気持ちをくすぐる指導を心がけたい。何を知るか・何を伝えるかだけでなく、誰について知るか・誰に伝えるかという相手意識があつてこそ、コミュニケーションの方法を工夫する必要性が生まれる。単元の目標に応じて、海外の人や異年齢・異校種の児童生徒との交流などの場面を設定する。そして、そのような相手に自分の考えなどを伝える場面においては、一方的に話すスピーチ形式だけでなく、双方向的なやりとりを通して理解する方法も取り入れたい。それにより、相手の話している内容を理解

しようとするモチベーションが高まったり、相手の使った表現をモデルとして「自分もそんなふう
に言ってみよう」とヒントを得たりすることができる。また、相手が言ったことに対して反応した
り、自分の考えを伝えたりすることは、日常の多くの場面で必要とされる力である。そのような即
興的に反応する力を身に付けることができれば、子どもはより多くの人とコミュニケーションを図
りたいという願いをもち、主体的に英語を学び続けるであろう。

以下に、子どもの学びのプロセスをモデル図として示す。



(文責 鎌田 真由美)

【参考文献等】

文部科学省『初等教育資料4月号』, pp.56-59, 東洋館出版社, 2014
 文部科学省『中等教育資料12月号』 p.81, 東洋館出版社, 2011
 島根県教育委員会「しまねの英語教育」2015